総ページ数：32p

2023 年度

発酵メディア研究ゼミ論文

指導教員：チェン ドミニク

題目

「包むことで得られる効果の研究」

早稲田大学文化構想学部
表象・メディア論系
学籍番号：1T200229

小野未結

概要（アブストラクト）

本論文は、自らの手で好きなものを包み開封して、その過程を通じて包んだものに対する愛着を培うことを目指すものである。筆者は、幼少期の経験や苺大福などの好みの食べ物から包むという行為を身近に感じており、包むと中のものが見えなくなるということに着目した。そこで、包む行為は日本文化に根ざしており、ものを保護したり扱いやすくしたりするために包んできたことや、そのあとに儀礼用の包みや梱包アートといった機能的役割をもたない包みが誕生したことなどを参照し、包んだものの価値を再認識する、保護しているという実感によって安心感を得る、包んだものの関心度が高まることという3点の仮説を立てた。仮説を検証するために、実験が行われ、参加者には好きなものを3つ用意してもらい、ひとつずつ布で包み、後日包みを開封してインタビューを実施した。結果として、1つ目の仮説は全員には当てはまらなかったが、包んだものに対する再評価の機会が生まれる可能性が示唆された。2つ目は、好きなもの全てに反映されるのではなく、自身に由来するものを包んだときに安心感が得られるということが明らかになった。3つ目は、実験の設計上、包む前と包んだ後のものに対する行動と心情の変化を確認することは難しかった。よって、仮説について全てを確認することができなかったため、実験を改善することが今後の課題として挙げられた。

目次

1. はじめに 1
1.1. 研究の背景と動機 1
1.2. 論文の構成 1
2. 関連動向 3
2.1. 日本の包みの歴史 3
2.2. 機能的な包みとは 4
2.3. 装飾的な包みとは 5
2.4. 梱包アート 7
2.5. 関連動向のまとめ 8
3. 提案 10
3.1. 予備実験の概要 10
3.1.1. 予備実験の結果 11
3.1.2. 予備実験の問題点 11
3.2. 実験 12
3.2.1. 仮説 12
3.2.2. 本実験の提案 13
3.2.3. 実験の流れ 14
4. 評価 17
4.1. 実験概要 17
4.1.1. 実験目的 17
4.1.2. 実験手順 17
4.1.3. 実験参加者 17
4.1.4. 実験結果 20
4.2. 考察 23
4.2.1. 仮説に関する考察 23
4.2.2. 実験から得られた改善点 24
5. まとめ 25

5.1. 本論のまとめ 25
5.2. 今後の展望 25
6. 謝辞 27
7. 参考文献 28

図目次

図 1. 「包み」の木 6
図 2. 予備実験の包み 11
図 3. A さんの包み 18
図 4. B さんの包み(1) 19
図 5. B さんの包み(2) 19
図 6. C さんの包み 20

表目次

表 1. 本論文の構成 2
表 2. 事前アンケートの質問項目 15
表 3. インタビューの質問項目 16
表 4. 包んだもの 18

1.　はじめに

まず本論文の動機と背景を説明し、次に本論文の構成を示す。

1.1.　研究の背景と動機

筆者はゼミ論文の執筆にあたって、興味のあることや好きなことを書き出した。結果として、プレゼントを包装すること、苺大福やブリトーなど包んで完成する食べ物を好んでいる傾向があるなど、包むことに関わる事柄が多く上がっていることに気づいた。思い返してみれば、幼少期からお店屋さんごっこでは、商品に見立てたおもちゃを布で包んだり、苺大福を年の数だけ食べたり、餃子パーティーのときには餃子の餡を包むことを手伝ったりと、包むことはいつも筆者の身近にある行為であった。このような経験から、日常生活に溢れている「包む」にもう少し目を向けてみようと思い、本論の執筆に至った。

では、包むことはどのような作用があるのだろうか。包むには、包まれるものと包むものが必要であり、中身と外側に分ける。中身が見えなくなると、中身を知らない場合は、何が包まれているのかを想像したり期待が膨らんだり、正体が分からないことに対して不安に思ったりする。逆に、中身を知っている場合は、中身を保護するためや、包みの形式によって、これは誕生日の贈り物であるとか、お年玉袋にお金を包めばお年玉として扱われるといった、中身に対しての意味付けを行うことができる。

そこで、好きなものを自分の手で包むことによって、早く開封して中身を見たいと思う気持ちを増し、さらに中身を守っているという安心感を得ることができる、中身を知らない状態と知っている状態の包みに対する感情を両立することができるのではないかと考えた。それは、現代において、物の消費が激しくなり、次から次へと捨てられていく物に対して、物に対する愛着の心を取り戻すきっかけになるかもしれない。

本論文では、「好きなものを包む」という提案により、「ものを大切に思う心」を獲得されると示すことで、包む行為は機能的な効果だけではなく、感情的価値を見出していくことを目標とする。

1.2.　論文の構成

本論文の構成は以下に示す表 1 の通りである。

表 1. 本論文の構成

1. はじめに	研究の背景、動機の説明および本論文の構成を提示する
2. 関連動向	本研究に関連する包みの動向を解説し、本研究の道筋を示す
3. 提案	本研究で提案する包むことで得られる効果のための実験プロセスを詳述する
4. 評価	実験の概要を示し、インタビューの分析を行う
5. 結論	本研究の成果と課題、および今後の展望を示す

2.　関連動向

本論文では、ものに対する愛着の気持ちを深めるための方法として包むことに着目した。よって本章では、日本における包む文化の歴史や、包むことに対して人々はどのように受け入れてきたかについて先行する研究や事例を紹介する。

2.1. 日本の包みの歴史

現代において、風呂敷を使って、ものを包む人は少数になってきているだろう。しかし、一枚の布を繰り返し使えることから、環境問題の解決の糸口として見直されてきている。風呂敷は今日まで続く包みの文化であることから、まずそこから包むことについて見ていく。

深澤琴絵、植田憲、朴燦一、宮崎清、樋口孝之らによる「飛鳥から平安時代における『包み』の文化」(2007）において、包みの文化について述べるにあたって、風呂敷の文化や語源の成り立ちから調査を始めている。そこで、風呂敷は、「脱いだ衣類を布に包み、湯あがりには包みを開き、床に広げた布の上で身支度をした。その後に脱いだ衣類、濡れた物などを布に包んで持ち帰った。このような習俗が定着し、『布を敷くこと』と『布で包むこと』が結合した。」[1]と説明している。さらに、『貞丈雑記』(1763～1784)を引用して「江戸時代以前は四方形状の布を全て『ひらづゝみ』と称したが、江戸時代では絹製のものを『袱紗』、布(木綿など)のものを『風呂敷』と区別して呼ぶようになったとしている。」[2]と述べている。江戸時代以前から日本には、ものを包む文化があったことがわかる。そして包むための布を、何を包むか、布の素材は何かによって、名前をつけて区別するようになったことから、機能的な面で適切なものを選んで扱いやすくしたりして、当時の人びとにとって、包むことが生活の重要な部分を担っていたのかもしれない。

そして、室町時代のイロハ引き辞書『明応五年版節用集』（1497）を引き、次のように述べている。

> 「財」の項目のなかに、「鼻高（僧侶が使用する革製の沓)」や「篳篥（雅楽の管楽器)」などとともに、「平包」が挙げられている。これによると、平包みは、ただの用具というよりも、包まれた中身だけではなく包む用具自体もきわめ

[1] 深澤琴絵・植田憲・朴燦一・宮崎清・樋口孝之「飛鳥から平安時代における「包み」の文化 ：「風呂敷」の語源とその前史」『デザイン学研究』54 巻 4 号,2007,p.48

[2] 同ページ

て大切に考えられていたことがうかがえる。また、その後の 1557 年に編まれた『黒本本節用集』にも、「平包」が記されている。今日、「風呂敷」と呼んでいるものは、元来、つつまれるものと同様に価値が高いものであり、それは、人びとにとって「つつむ」という行為がいかに重要な位置づけに置かれていたかを示すものだといえるだろう。[3]

つまり、室町時代における「平包」の存在は、包む行為が単なる機能的ものではなく、むしろ包まれたものだけでなく、包むための布自体にも価値があったとしている。そして、包む用具が大切なものとして考えられる対象であったことは、当時の社会において「包む」という行為自体が、物事に対する深い愛着や敬意を表現する手段であったことを示唆しているのだ。

2.2.　機能的な包みとは

「つつむ」という行為を研究する際に、「包み」について調査することは重要である。その中でもパッケージデザインについて紹介する。

パッケージデザインは日常生活に密接に結びついていて、パッケージの色彩、形状、素材などから、消費者の感性や意識に訴えかけ、ものを保護するといった機能面でも、商品を包むことについて、考えられぬかれた「包み」だといえるからだ。

まず、パッケージデザインの根幹である三大機能をみていく。三大機能とは、白尾隆太郎監修、福井政弘、菅木綿子らの「パッケージデザインを学ぶ 基礎知識から実践まで」(2014)で次のように紹介されている：1.中身を保護する　2.中身を扱いやすくする　3.中身の情報をわかりやすく伝え、販売を促進する。[4]ここで、本論文の実験で包んだものは販売を促進するものではなく、かつ他人に渡すものではないという違いにおいても、パッケージデザインの３大機能は有用であるかを検証する。

「１の中身の保護とは、中身を製造したメーカーから商品が問屋や小売店に出荷され、消費者が購入して自宅に持ち帰り開封するまで、中身を変質させずにしっかりと守ることである。」[5]購入して自宅に持ち帰り開封するまでを、自分の手で包み、任意のタイミングで開

---

[3] 同ページ

[4] 白尾隆太郎監修,福井政弘,菅木綿子著『パッケージデザインを学ぶ 基礎知識から実践まで』武蔵野美術大学出版局,2014,p.11

[5] 同ページ

封するまでと置き換える。食品などの腐敗が進まないものであれば、中身が変質することはない。ただし、包むものの素材や形状によって、外的刺激が加えられてしまった際に、緩衝材の役割を担う場合と、あるいは包むための素材が弱く中身が損傷する場合が考えられることから、完全には中身を保護することができない。

「２の中身を扱いやすくすることとは、パッケージを箱状にすることで店頭に陳列しやすくしたり、中身を取り出しやすくしたり、手を汚さないような工夫をするなど利便性を向上させることだ。」[6]本論文では、自分の手でものを包むことを研究の対象にしているため、包んだものが見えない、使うことができなくなるという点において、利便性が損なわれているといえる。

「３の中身の情報をわかりやすく伝え、販売を促進することは、おもにグラフィックデザインによって表現される。」[7]そもそも販売を促進するような目的はないため、情報の開示は行わない。

上記で示してきたように、パッケージデザインの三大機能と本論文で扱う包みに対する価値観はあまり一致していない。しかし、考えぬかれたパッケージデザインは、商品に作り手の思いを乗せる手段であり、商品を手にする消費者に直観的な魅力を与える。パッケージが印象的であれば、商品はただのものとして見られるだけではなく、消費者の記憶に刻まれる要因になり得る。したがって、思いがこもったパッケージデザインは、三大機能の役割だけでなく、商品に対する消費者の愛着を育む重要な要素といえるだろう。この点において、パッケージデザインのように本論文の包むという行為が、ものへの慈しみの気持ちに帰結するかもしれない。

2.3.　装飾的な包みとは

次に、機能的な面ではなく、装飾的な包みとはなんだろうか。このことについて、額田巌の著書「ものと人間の文化史 20・包み」を参照したい。

額田は、包みの文化の発展について老木の姿(図１)を用いながら、次のように説明している。

> ここで幹となっている「作業用」とは、太古の昔から今日まで徐々に発展してきた「包装」や「梱包」のことであり、これは「包みの文化」の根幹をなして

[6] 同ページ

[7] 同ページ

いるのである。この幹が生育するにつれて「信仰の枝」が分かれ、さらに成長して「儀礼の枝」が生まれ、さらに続いて「造形の枝」が成長したようである。[8]

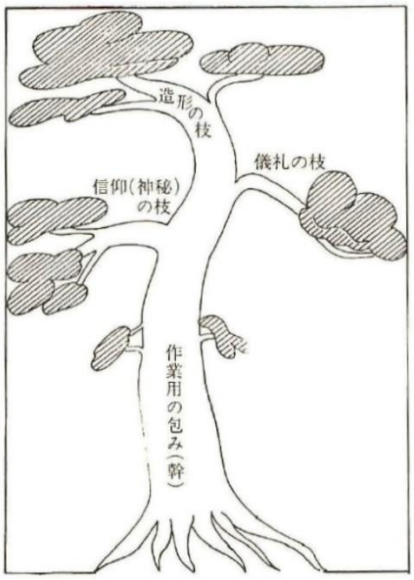


図 1. 「包み」の木[9]

「作業用の包み」が包みの文化の根幹にあるということは、元来、包みは包まれる内容物を保護し、取り扱いやすくするための手段であったことがわかる。先に述べたパッケージデザインの３大機能と類似した、機能的な役割が根底にあるといえる。そのうえで、特定の宗教的儀式や儀礼と密接な関係になることで、単なる包みから、文化的・精神的な側面にも深く関わるようになった。

さらに、礼儀包みについて、同書で額田は、「故実とは元来、機能的な意味はなく、貴族社会や武家社会にのみに通例する礼儀であった。たとえば人に進物をするとき、その包み方は、同時にその物の価値と、それを持参した人の価値を表現するものであった。」[10]と述べている。礼儀包みは、相手に対する敬意や感謝の気持ちを示すと同時に、贈り手自身の立場や人間性を表すものであったため、物事の表面的な交換以上に、社会的な繋がりや人間関係の構築において重要な役割を果たしていたのだろう。包み方の美しさや慎ましさから洗練されたものを感じるほど、贈り手の思いやりが反映されているとみることができる。このこと

[8] 額田巌『ものと人間の文化史 20・包み』法政大学出版局,1977,p.3

[9] 出典：額田(1977)p.3

[10] 同書,p.6

は、現代でも続いている現象ではないだろうか。例えば、お年玉を渡すときには、現金をそのまま渡すよりもお年玉袋などに包んで渡した方が、正月の風物詩であることを感じられるし、その包みが個性的なものほど、お年玉をくれた人が義務的にお年玉を渡しているのではなく、楽しんで考えてくれている様子などを想像できて、印象に強く残る。

2.4. 梱包アート

次に、包まれたものを享受する側の視点として、クリストの梱包アートを紹介したい。

クリストは 1935 年生まれのブルガリア出身のアーティストで、パートナーのジャンヌ＝クロードとともに、都市の建造物や樹木などの自然をシート類で包む、梱包アートを行ってきた。1995 年には、ベルリンの旧ドイツ国会議事堂を銀の布で包み、2020 年にクリストが亡くなってからも、彼らが構想していたプロジェクトであるパリの凱旋門が布で包まれた。このように都市の景観を大規模に変容させるものだが、作品のお披露目期間は数週間程度となっており、多くの時間を要する準備期間と反して刹那的なアートである。

北山研二は著書「見せるアートと見せないアート：クリストの梱包アートについて」(2015)のなかで、中原佑介によるクリスト評論を引き、次のように述べている。

> 本来、梱包は、梱包されるものを保護するためになされるが、ここでは保護が目的ではなく、梱包されるものと梱包そのものに焦点を当てるという意味で新しいのだ。しかも、梱包されるものは、日常世界では機能と役割を持っていたが、ここでは、梱包によって梱包されたものは機能と役割が失効して「もの」化する[11]

通常、梱包は物を保護し、取り扱いを容易にするために行われるが、クリストはその概念を転換し、保護ではなく視覚的な変容と新たな意味を持たせることに焦点を当てた。この逆説的なアプローチが、彼の作品に新しさと独自性をもたらした。

クリストは、大規模な建造物や自然を梱包する前に、花、日曜紙、椅子、テーブル、手押し車、バイク、裸体、石油缶、車等[12]の日常生活で使うものや見るものを梱包していた。このような梱包された対象は、日常の中で特定の機能と役割を果し、意味をもっていた。それ

---

[11] 北山研二「見せるアートと見せないアート：クリストの梱包アートについて」『ヨーロッパ文化研究』第 34 集,2015,p.91

[12] 同ページ

が、我々の生きる世界において当然のように受け入れられているが、梱包アートにおいては、梱包によってその役割や機能が奪われ、物があるがままの存在に還元されることで、「もの」が新たな文脈で浮かび上がる。これによって、日常のものが抱える概念や価値観が問い直されるきっかけとなる。

さらに北山は、クリストの隠して見せる方法を取るアートについて、次のように述べている。

> 観客はあるものが覆い隠されると、その外的形状やすでに承知している当該の「もの」の認識がほとんど名義上のものになり、細部の記憶が失効することに気がつく。いったい、その「もの」は何であったのかと。日常的に目にするもの、普段意識していないものが覆い隠されると、そのものへの関心度が一気に強まる。もちろん、覆い隠されたものが何であるかは漠然と想起できるだろうから、それは覆い隠されたものの不在の現前となる。[13]

日常風景の中で、何気なく見過ごしてしまうものや見慣れているものが、アーティストの手によって覆い隠されると、その対象に対する形状も含めた既知の情報が影響を受けるため、観客は対象物の本質的な部分について疑問を抱くことになる。隠して見せられたものは、一時的に抽象的な存在となり、観客はものに新たな意味や重要性に対する再評価を促す。よって、隠されたことによって、生まれた情報の余白が観客の関心をひきつける要因なのだろう。

2.5. 関連動向のまとめ

布でものを包むという行為は古くから行われていて、包まれるものを保護する、取り扱いやすくするための作業用の包みが、日本の包む文化の根幹をなしている。そして、包むための用具自体が、包まれるものと同等に価値があり、物事の表面的な交換以上に、社会的な繋がりを表す重要な役割を担っていた。次に、機能的な包みとして発展してきたパッケージデザインに触れ、本論文で扱う包みの役割とあまり似ていないことを記したが、パッケージデザインはそれぞれの内容物によって包みの工夫を凝らすことで、企業側の思いも詰めて、消費者の元へ届いていることは、ものへの愛着が増すという点で同じであることが分かった。さらに、梱包アートでは、見慣れた風景やものを覆い隠すことによって、逆説的に中のものへの関心度が強くなることを示した。

---

[13] 同論文, pp.92-93

関連動向では、昔から現代にいたるまで人びとと包むことの関わり合い方において、ものを包むことで、機能的な役割だけでなく、感情的な面にも働きがあることがわかった。本論文では、人に渡す目的のない、自分のためにものを包むということは、どんな効果を生むのかについて語るものとする。次の章では、実際に自分の手で、自分のためにものを包むことについての実験を設計・提案する。

3.　提案

２章の関連動向を踏まえ、提案するものの方向性が示されたが、ここで予備実験として、筆者が過去に好きだったものを布で包むという実験を行った。筆者はこの予備実験から、問題点をみつけた。そして、それを踏まえて再検討した仮説を論じたうえで、本実験の提案をする。

3.1.　予備実験の概要

深澤らの研究で、中国最古の字書『説文解字』を引き、「包み」を表す文字を紹介していた。そのなかの、「『裹』は、古代中国では、魂に活力を与え再生させるという呪術的な二つの意味(投果と魂振り)をもっていた。」[14]というところから着想を得て、ネガティブな思いが残るものを包むことで、ポジティブな感情にまでは変化しなくとも、マイナスからゼロになるように思えるかもしれないという仮説を立てた。次に投果と魂振りの意味を説明しておく。「投果は実を投げ交わして愛を確かめ合うこと。魂振りは霊魂を揺さぶり、魂の活力を取り戻そうとする行為。」[15]であり、投果は風習で魂振りは呪術のひとつである。

さらに、その実験装置を練るにあたって、「新しい生命を創造する力があるとされる『果』を衣のなかに入れることを意味する『裹』は、単に果を裹むことを示すだけではなく、魂振りを示すものであった。」[16]ということを参考にし、苺大福の形式を取ることに決めた。なぜ苺大福にしたのか。筆者は、幼少期のころから、誕生日に苺大福を年の数だけ食べるということを大学入学まで行っていた。そのため、新しい生命を創造すること、つまり生命の誕生に、苺大福がすぐに結びついていたからである。そして、苺大福はまさに苺という果実を餡子とともに皮で包んで食べるものであるから、苺大福の形式を取り入れることとなった。

以下に実験の手順を説明する。

1. ネガティブな思いが残るものを赤いフェルトで包む
2. １で包んだものを茶色のフェルトで包む
3. 白い布で、２で包んだものと綿を一緒に包む

---

[14] 同掲書,p.52

[15] 同書, p .56

[16] 同ページ

3.1.1. 予備実験の結果

筆者は、ネガティブな思いが残るものに以前好きだったアイドルのグッズを包むことにした。好きだったがそのアイドルの脱退を受け、応援してきた歳月を思うと苦しさや悔しさが残る終わり方だったためである。約 10 分程度で包み終わり、手のひらサイズの包みができあがった。中に綿を入れたことで丸み帯びて、白くてふわふわで可愛く思えてくるのを実感した。その様子が小動物のような生き物の感覚もあり、ネガティブな(あまり好きではない)ものを包んだとはいえ、落とす、投げるなどの外的攻撃を行うことは憚られた。



図 2. 予備実験の包み[17]

3.1.2. 予備実験の問題点

この予備実験によって、見直すべきところが 2 点見つかった。

・包まれるもののへの関心度

まず、ネガティブ(あまり好きではない)ものを包んでいるために、そのものが見えなくなったとしても、包みを開封したい、中身の様子が気になるといった感情が湧いてこなかった。普段から目につくところに置いておらず、見慣れたものが隠されたという違和感がなかった。したがって、そのものに対しての関心度が上がらなかったという結果になった。

[17] 筆者撮影

・過剰包装

次に、フェルトを 2 枚と苺大福の形状を再現するために綿、その上から白い布で包むので、中身のものの形が透けてみえることがなかった点が残念であった。加えて、中身そのものやものが包まれているという状態よりも、ふわふわ感や白くて丸み帯びている様子の可愛さに目がいってしまうところも問題点だった。

これらの問題点を解消するためには、

・包まれるものの定義を改める

・包まれるものの存在が感じられるような包み方にする

ことが必要だと考えられる。

3.2. 実験

予備実験で明らかになった問題点を改善し、仮説を再検討し論じたうえで、本実験の提案をする。

3.2.1. 仮説

本論文における仮説は、以下の 3 点である。

① 包まれるものの価値を再認識できる

② 安心感が得られる

③ 包まれるものの関心度が高まる

以下に、仮説について詳しく述べる。

①包まれるものの価値を再認識できる

ものを包むと、その姿が見えなくなる。包みを開封するまで、包んだものの機能的役割が使えなくなり、その存在が課している役割に対する依存度を認識させられる。包んだものが精神的な支えを担っているものであれば、心が落ち着かなくなってしまたり、幸福感が低下したりするかもしれない。そのような役割に気づかされるとき、そのものの価値に失って初

めて気づくという体験をしているのではないだろうか。包むことによって、ものを失わずに、ものに対する感謝や大切さ、その価値を再認識する機会を得られると考えた。

②安心感が得られる

包む行為は、ものを自らの手で包み込み、管理するというアクションを内包している。そして、包んだものを保護するという包みの根幹ともいえる役割がある。ものをコントロールし、整理しているという実感にも繋がるところがあるのではないか。ものを包むことによって、包まれた対象が自分のものであるという感覚が協調され、さらにものが傷つかないように守っているということが安心感を生むかもしれないと考えた。

③包まれるものの関心度が高まる

関連動向の章で、北山が梱包アートを行うクリストについて述べていることを紹介したときに、見慣れているものを包むことで逆説的に包んだものの関心が増すと説明した。このことから、自らの手で包んだとしても、見慣れたものは存在感を放ち、気になるものとして見られるのではないだろうか。包まれた状態は視覚的な障壁を作り出し、包むことを行った者と包んだものの距離感や関係性が変わる可能性がある。それによって、包む前と比較し、包んだ対象の扱いや関わり合い方、意識の変化が現れると考えた。

この３つの仮説を踏まえ、自分のためにものを包むことは、ものへの愛着が増すことを期待したい。

3.2.2.　本実験の提案

予備実験の問題点を踏まえて、実験の仮説を再構築した結果、実験の手順を予備実験と比べて大きく２つ変更した。

ひとつめは、包まれるものを「好きなもの」とした。あまり好きではないと感じるものを包んでも、感情の動きに著しい変化が見られなかったためである。なぜ好きなものという条件にしたのか。実験の参加者に対して、包みたいと思うものを包んでくださいという形式にしてしまうと、包みたいものという言葉が広義的すぎて、逆に包むものが見当たらないという現象に陥る可能性があるからだ。実際、筆者の周りの数名に、「包みたいものはある？」と尋ねると、「パッとは思いつかない」「何を包んでいいか分からない」と答えた。そこで、もう少し具体的に包むものを絞ったほうが、実験の参加しやすさが保たれると考えた。候補として、「お気に入りのもの」という案もあったが、好きなものという条件よりも、気軽さ

が損なわれ、お気に入りのものしか包んではいけないという縛りがきつく感じることを避けるべきだという考えのもと「好きなもの」という条件にした。好きなものにすることで、参加者に楽しんで気軽に、そしてある程度なんでも包んでいいとする余白を残すことにした。

ふたつめは、包みすぎることで包み自体の話ではなく、ふわふわして可愛く思えるといったような、包み以外のところを重視してしまう可能性があるため、布 1 枚で包むことにした。北山のクリスト論によると、包むための布について次のように語られている。

> 見えないものを見せるのは布である。布が見えるはずのものを観客の視線から遮断する。…しかも、その布自体に特別な能力があるわけではないのに、隠すべき対象の機能や役割どころか、その存在すら空無化できるのである。そして、微妙な色合いの変化と表面の感触の変化を見せて、意味ありげな雰囲気を生み出す。[18]

布は包んだものの形に沿うようにして、梱包できる良さがある。この良さを生かすためにも、何重も重ねた布で包むより、1 枚の布で包んだもののシルエットがうっすらみえ、中身の存在の形状の記憶が曖昧になっていく姿を記録したほうがいいだろう。よって、苺大福の形式から離れた。

3.2.3. 実験の流れ

以下は実験参加者に説明した実験の流れと、実験に入る前に回答してもらったアンケート内容である。

①好きなものを見つける

好きなものとは、推し活グッズ、旅行のお土産、家族からのプレゼントなど自分が好きだと思っているもの全てが対象です。ただ、用意した布に包める大きさであることが条件です。

②布を包むもののサイズに合わせてカットする

[18] 同掲書,p.98

１回包んだものは開けず、カットして余った布を使い 2 個目、3 個目を作ってください。正方形にカットする必要はありません。長方形でも問題ありません。

③カットした布で好きなものが見えなくなるように包む
中身が見えないように包んでください。のり、テープ、ホッチキス、などで閉じないでください。お使い包み[19]のように、布の端を結ぶようにして包んでください。

④開封する日(道具を渡してから 1 週間後)まで、包んだまま保管しておく

⑤開封し、インタビューを受ける
実験終了日に包みを開封し、その後実験に関するインタビューを実施します。

ここで、本実験で使用した布について説明しておく。実験参加者に、1 枚の布（88cm×200cm）を渡した。その布を好きなもの（包まれるもの）の大きさに合わせて裁断して使ってもらうことにした。包むための布の大きさに制限を設けないことで、包みたいものを考える余地が広くなると考えた。

そして、布の色を実験参加者の好きな色に設定した。これは、布の色が実験結果に影響することを防ぐためである。最初は白色の布で統一しようと考えていたが、参加者の中に白色が好みではないという人がいるかもしれない。そうなると、好きなものを嫌いな色の布で包むことになるので、好きなものという感情が変わってしまう可能性が予想された。よって、事前に好きな色を聞き、その色の布を用意した。

以下は事前アンケートの質問項目である。

表 2. 事前アンケートの質問項目

	質問項目	回答方法	目的
1	日常的になにを包んでいますか？	自由記述	経験による差異の把握

[19] 京都ふろしきドットコム「風呂敷包み方お使い包み/四角いものを包む」 https://kyofuroshiki.com/tutumiitiran/otukaitutumi/ （最終アクセス 2023/12/04）

2	上記以外で包む経験をしたことがありますか？	自由記述	同上
3	包まれたものを受け取ったときに、感じる感情を教えてください。	自由記述	包みに対しての認識を知る

布を渡してから1週間後に個別でインタビューを実施した。以下の表が、事前に用意していた質問項目である。インタビューをしながら、臨機応変に対応していたため、質問する順番は異なっている。

表 3. インタビューの質問項目

	質問項目
1	何を包みましたか
2	なぜそれを包みましたか
3	包んでみてどうでしたか
4	包むことは大変でしたか
5	好きなものが見えなくなることについてどう思いましたか
6	包んだことによって、好きなものを守っているような感覚はありましたか
7	包む前と包んだ後で、好きなものに対する価値や関わり合い方に変化はありましたか
8	日常生活で、包むという行為や包みに対する意識に変化はありましたか
9	包んでから開封するまで、包みをどのように保管していましたか
10	包みを開けたときの感情を教えてください

4. 評価

この章では、実験の概要と評価方法を示したのち、分析を行い評価・考察をする。

4.1. 実験概要

4.1.1. 実験目的

自らの手で好きなものを包むという行為を通して、①包まれるものの価値を再認識できる、②ものを包んだことによって、安心感が得られる、③包まれるものの関心度が高まる、という 3 つの仮説を検証する。

4.1.2. 実験手順

【実験全体の流れ】

1. 事前アンケートに回答する
2. 好きなものを包む
3. 包みを開ける
4. インタビューを受ける

4.1.3. 実験参加者

実験は参加者に必要な布を渡した日から 1 週間でものを包むようにお願いし、最終日に包みを開封してインタビューを行った。参加者は事前に募集した 20 代の大学生 3 人(男性 1 名、女性 2 名)である。事前アンケートでは、これまでの包むという行為に関する経験を聞き、経験による差異を把握した。参加者は A さん、B さん、C さんとする。実験後のインタビューは、A さんは対面で実施し、B さんと C さんはオンラインで実施した。

以下の表に、参加者が包んだものを記載した。布を渡した日は 2023/11/28 で、開封してインタビューを行ったのは、2023/12/05 である。表の日付はものを包んだ日を示している。

表 4. 包んだもの

A さん	イヤーカフ (2023/11/29)	日記 (2023/11/29)	ぬいぐるみ (2023/11/30)
B さん	自身の身体 (2023/12/04)	うさぎの人形 (2023/12/05 夜中)	絵 (2023/12/05 夜中)
C さん	缶バッジ (2023/11/30)	キーホルダー (2023/11/30)	だるま (2023/11/30)

次に包みの様子を写真で記録に残した。

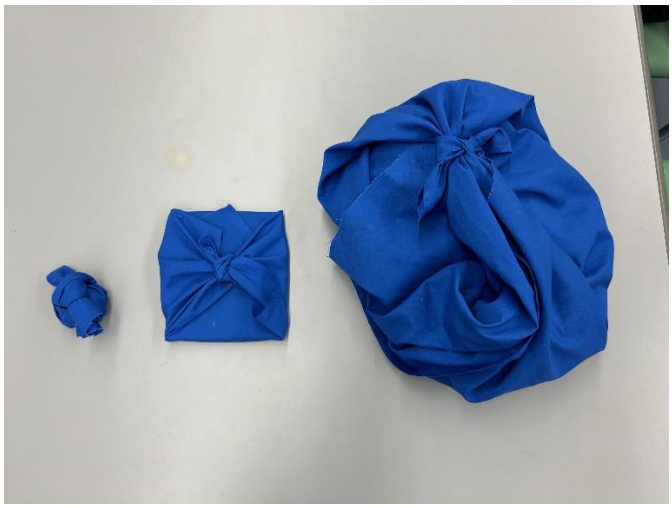


図 3. A さんの包み[20]

[20] 筆者撮影



図 4. B さんの包み(1)[21]



図 5. B さんの包み(2)[22]

[21] B さん撮影

[22] B さん撮影



図 6. C さんの包み[23]

4.1.4. 実験結果

本節では、インタビューの内容を一部抜粋して各観点からまとめる。

●好きなものに対する感情

好きなものに対する感情の変化は、そのものの好き度合いによって異なることが分かった。A さんは、人生のなかで特に大切なものであるぬいぐるみを包んだ。そのことについて、「お別れするのがツラすぎた。」と常にともに過ごしてきたものに対する愛情を語った。しかし、日常生活的には使うことはないというイヤーカフは、ぬいぐるみほど包んでいる間に見たいや身に付けたいという感情はなかったという。逆に B さんは、人形について「当たり前すぎて無視していたけど、気にするようになった。」と話した。C さんは、包んだものへのその後について「だるまは定位置があるから定位置に戻すと思うけど、この 2 つは元の場所に戻すのか、また考えるのかは、まだわからないかも。」と語る。その一方で、「やっぱり好きなものだと確かめられている感じもある」と包んだことによって、ものに対する行動や意識の変化までは起きなかったが、ものへの愛着を確かめることができたようだ。

●包む行為について

A さんは「安心感とか、精神的な安全性みたいなのは高い気がする。」と実験の包む行為

[23] C さん撮影

について振り返った。B さんは、包んだものは普段、部屋に置いてあり存在すら忘れているところがあったが、包まれることによって存在感を放っている感じがあったという。C さんは、キーホルダーに関して、好きなものではあるが、あまり良くない思い出も付随しているため「ある意味、風呂敷で封印してみるかと思って包んだ」と、包むときの気持ちを語ってくれた。そして A さんと C さんは、好きなものを大切に包んだという実感を得た。

さらに、A さんと B さんはものと語りかけ、もしくは語り合いを行っているようだという。A さんは「自分が大切にしているよっていう表明になっている気がした。この子(ぬいぐるみ)に対して何か自分が大切だよっていうことを言えた感じがあって満足」と語る。B さんは「包んでみて、主体性を持つような、絶えず語りかけている感じがある。」とものと相互的なコミュニケーションができている感覚があったという。

包む行為に関して、包み方についても尋ねた。A さんは過去の経験で、弓道の道具を風呂敷で包むことを行ってきた。今回の実験の包みと比較して、「弓道の道具は、持ち運ぶために圧縮するみたいな気持ちで包んでいたが、好きなものは、ふんわり包んだ。ぬいぐるみは、体勢を整えて綺麗に包んだ。」と語る。C さんは、包むものに対して布が大きすぎると「ぐるぐるして、結んで結んでってしないといけないのが不格好になると思った。だから、それにはならないようにした。」と語った。その一方で、B さんは包み方に特にこだわりはなかった。

●ものを守っているという感覚について

布が保護の役割を担う膜のような効果があったと主張された一方で、守っているという感覚はなかったとする参加者もいた。A さんは、ぬいぐるみをしばらくの間、家の中で大切に扱ってきた。そのぬいぐるみを外に連れ出すことに違和感や汚れるかもしれないという不安を抱えていたが、「家の空気を包んだまま持ってきた。」とし、家の安全な空間ごと持ち運びしている感覚があったと語る。さらに、「包みはバリアみたいで、家からここまでワープしてきたみたいで、電車などの害を受けなかった」と、包むことによって安心感が得られているようだ。B さんは、包みのひとつめに自らの身体を包んだ。他人の手を借り、開封の日を迎えるまでに布を解いてしまっている。これらは、本実験の自らの手でものを包み、参加者全員が同日に開封するという点からずれているが、B さんは「一面ピンクみたいな感じで結構安心感があった、守られているみたいな感覚があったかもしれない」と包まれたときのことを振り返った。さらに、別の観点では自らの身体が包まれている写真を見ると「もの扱いされている感じもあって、安心感ともの扱いされていることがアンビバレントな感じがある」と、安心感が得られる一方で、自身がもの化していることの不安感を感じていた。

●ものが見えないことについて

見えないことで不安になる参加者もいれば、包む前とあまり変わらなかった参加者もいて、反応が二分する結果となった。A さんは、包んで見えないものに対して「想像すればするほど、それのイメージがはっきりしないものになっていく感じがあった。そこに存在しているかの確証がなくなり、本当に入っているのか不安になった」と、ものの形状の記憶が曖昧になっていき、布ごしにものを触って包みのなかに確かに存在しているかを確認していたことを語った。C さんは、「缶バッジとキーホルダーは既に時々隠しているときがあり、見えなくなってもどこかへ行ってしまったという気はしなかったが、だるまは毎日見ていたからいないなとは思った。」と語り、好きなものが見えなくなったが早く包みを開けて見たいという欲求はなかったとしている。

●包み保管について

包みの保管場所は実験参加者それぞれであった。B さんは、包みを人形は元の場所に戻して保管し、絵は机の上に置いておいた。C さんは、生活しながら見える場所には置いていなかった。また A さんの意見が特徴的であった。A さんは、「包まれていることで他者から、それが大事なものかどうかの判別がつかなくなっているなと思って、壊されたりしたら嫌だから絶対家族が触らない、自分の部屋の机の上に置いておいて、触られないようにしていた。」とものを包んだことによって、本来であれば容易く触れられないものが、ブラックボックスのようになり他者とものの価値観の共有が出来なくなると訴えた。

●開封したとき

開封したとき、久しぶりに好きなものと対面して嬉しいような感情を語ってくれた参加者が多かった。開封する前に A さんはドキドキするといい、包みを開けた際に、入っていることはわかっているが、きちんと入っていたことを確認できた安堵感とものが新鮮にみえると感じたようだ。C さんは、包みを開封し、おかえりという気持ちが出てきたという。

●布について

大きめの布を渡し、包むものの大きさに合わせて各自で裁断してもらう方式についての意見をもらった。筆者が参加者に対して実験の説明をするときに、一般的な風呂敷のサイズやお弁当箱を包む際のサイズを提示し、布の裁断に困らないように手引きした。C さんが参考にして、布の大きさを測って切ったと言い、ある程度の道標は必要であったと改めて認識した。

そして裁断することはどうであったかと聞くと、A さんは、「大きい布を裁断することが

日常の中にない行為で、新鮮に印象に強く残っている」と裁断したときの感想を語ってくれた。B さんも、裁断するときに楽しい音が出て、ハサミでチョキチョキ切るのがストレスを和らげたという。布の大きさに関して、A さんは「大切なものほど、布は大きいかもしれない。」と語った。実際、包んだものの大きさがそれぞれ異なっていたので、単純な比較はできないが、この中で 1 番大切なものと教えてくれたぬいぐるみは、他のものと布の比率を比較して、やはり大きかった。C さんは、綺麗に包むために大きすぎないサイズで布を裁断した。一方で、B さんは布の大きさにこだわりはなかった。

4.2. 考察

本節では前節で得られた結果をもとに、仮説を検証し論じる。

4.2.1. 仮説に関する考察

①包まれるものの価値を再認識できる

A さんの包む際のぬいぐるみに対する感情は愛情からくる別れの痛みで、実際にぬいぐるみの体勢を綺麗に整え、布でふんわり包んでいることからも、包んだものに優しさや大切さが表れている。さらに、C さんも大切に包んだという実感を得ていることからも、これは包む行為が包まれた対象に対する愛情や価値観を反映する一手段であるといえるだろう。また、普段から見えない場所に置いてあり、あまり良くない思い出が残るものさえ、包むときに改めてそのものが好きであると確かめられたという意見もあったことから、包むことで自分にとってそのものがどのくらい重要な位置付けにあるかを再認識できる機会になったといえる。しかし、仮説で述べていた包むことで機能的役割を失い、ものが使えなくなることで価値を再認識できると機能面と精神面の両方で仮説を立てていたが、今回は A さんのイヤーカフだけがその役割を持っており、それも日常的には使わない大切なものだったため、機能的な方向には十分な結果が得られなかった。

②安心感が得られる

包むことによって、中のものを守っている感覚があり安心感を得たと答えた実験参加者は、共通するものを包んでいた。B さんが自身の身体を包んだときと、そして A さんが、自身と同義と思えるくらい大切にしているぬいぐるみを包んでいたということである。逆に、C さんは自身の代わりとなるものを包んでおらず、包んでいるものを守っているようには思っていなかった。この結果は予想していなかったことで、好きなもののなかでも、包むことを行う者自身に由来するものが一番影響を受けることが分かった。当初は包むことによって、所有感が強調されることと、他人から傷つけられないことによって、安心感に繋がる

と考えていたが、所有感はあまり関係ないことが示唆されている。包むための布が、バリアのように結界の役割を果たしたと感じるときに、安心感を得るようだ。その一方で、その結界は包んだ人にしか分からず、他者からみると、何が包まれているか分からない状態をつくってしまうことが不安要素になっている。贈り物のように中身が分からない包みを他者に渡し、ものの情報を共有するわけではない。自分のためだけにものを包むために、ものが他者の目に触れず、ものの価値観が共有されないのが不安になる原因だろう。

③包まれるものの関心度が高まる

普段から見えない場所に保管していたものを、元の場所に戻すのか、生活していて常に見えるところに置いておくのか分からないという意見があった。そして、見慣れた景色に異様な包みがあることで、存在感を放っていて、気にかけるようになったという意見もあったが、包みの布がその景色になじまず浮いていた可能性も考えられることから、純粋に包みについての反応なのかを判断しかねる結果となった。その一方で、AさんとBさんが包みと語り合いや語りかけているような感覚を覚えていて、包み手側から、ものへ大切なものであると意思表示をし、ものは主体性を持つような感覚があったという。包んだものの存在や関係性に新たな深みが生まれ、対話や交流の形ができたのではないだろうか。

4.2.2. 実験から得られた改善点

今回の実験では、包む行為・包んだ対象物・開封などの実験で得たい情報全てを開封した日と同日に、1回のインタビューで行っていた。開封により、参加者が包んだ対象物に対する久しぶりの印象を率直に述べることが期待された。しかし、包む前と包んだ後の意識の変化を即座に把握するのは難しいという課題が浮かび上がった。実際のインタビューでは、参加者が答えに悩んだり、難しい質問で今は分からないといった声があった。そして、包んだ対象物の取り扱いの変化や、そのものを元の場所に戻すのか、日常生活でより見える場所に置くなどの、他の場所に配置するのかについても、明確な結果を得ることができなかった。この課題に対処するために、包むタイミングを具体的に指定し、実験の中間アンケート(インタビュー)を通じて、参加者の包む行為や開封したことについての感想を聞くだけでなく、数日後に再びインタビューを行い、包んだ対象物の意識の変化や包む前との比較に関連する情報を収集すべきだった。これにより、参加者が包む行為とその後の経過をより明確に理解しやすく、包むことを行ったことで変化した事柄に関するデータの品質向上が期待できる。包む行為に関する具体的な指針を導入することで、実験の信頼性が向上し、結果の解釈が容易になるだろう。

5.　まとめ

最後にまとめとして、本論の過程と結果を振り返り、今後の展望について述べる。

5.1.　本論のまとめ

第 1 章では、本研究に至った背景と動機について、筆者自身の経験や好みの食べ物などから、包むことが身近な事柄であったことから出発し、包むという行為に着目したことを示した。研究の概要と論文の構成も提示している。

第 2 章では、日本の包みの歴史や、包むことに対して人々はどのように受け入れてきたかに焦点を当て、4 つの関連動向を紹介した。関連動向の 1 つめは、昔は包むものだけではなく、包む行為自体にも価値があったことを示した。2 つめは、パッケージデザインを取り上げ、パッケージという包みには 3 大機能が備わっていることを、3 つめは機能的な面ではなく、装飾的な価値を持つ包みがあることを示した。最後にブルガリア出身の梱包アートのアーティストであるクリストを紹介し、次章の仮説・実験の提案につなげた。

第 3 章では、関連動向を踏まえ、予備実験を通じて浮かび上がった 2 つの課題をもとに、その課題を達成することを目標に、①包まれるものの価値を再認識できる②安心感が得られる③包まれるものの関心度が高まるという 3 点の仮説を立てた。それを検証するために好きなものを自らの手で包むという実験が設計された。

第 4 章では、実験の結果とその考察を提示した。実験参加者にものを包んでもらい、後日、開封を行いながら、インタビューを実施した。インタビューの内容を結果として記載した。仮説に対する結果は、仮説が当てはまる人もいれば、そうでない人もいて、半々であった。実験方法の改善が必要と見られた。

5.2.　今後の展望

今後の展望として、多様な参加者にあらゆる対象物を包んでもらう実験を提案する。

予備実験で、ネガティブな思いが残るものを包むことに対して、顕著な変化が見られなかったため、本実験では好きなものを包むように変更した。しかし、包み方を変える工夫や、包みを日常のなかで目にするところに置いておくなどの保管場所の指針を示すことによって、ネガティブな思いが残るものを包んでも、ある程度の結果は得られただろう。他に包む対象を、何かを行うための機能が搭載されているもの、端的に言えば文房具や服など使うことでそのものの価値が発揮されるものを包むことにしても、参加者の心情や行動の変化がどのように影響を受けるに関する新たな発見があるのではないだろうか。

また、今回の実験参加者が 20 代前半の大学生であったことから、次の実験では異なる年

代や文化背景を持つ参加者を対象にすることが有益であると考えられる。たとえば、日常的に風呂敷を使う文化に触れていた高齢者や、包む行為が日本文化や伝統に根ざしていることを踏まえ、日本の包む文化を知らない外国人など異なる属性の参加者を募り、包む行為が異なる文脈や環境でどのように受け取られるかを調査することで、包む行為の普遍性についての理解が深まる。これにより、研究の汎用性が向上し、異なる人々の包む行為に対する反応を理解する基盤が築かれる。

このような多様なアプローチを通じて、包む行為の心理的なメカニズムについての理解を深め、包みが持つ多面的な意味や影響についてより包括的な知識を構築することが、今後の研究の重要な方向性となるだろう。

6. 謝辞

本論文の執筆にあたって、何度も面談をしてたくさんの助言をくださったドミニク先生、お忙しい中で実験に快く協力してくださった方々、ゼミ展示の準備もあるなかで励ましてくれた発酵メディア研究ゼミの皆様、そして私の大学生活を支えてくれた家族、皆様の助けがあって、論文を書き上げることができました。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

7.　参考文献

-深澤琴絵・植田憲・朴燦一・宮崎清・樋口孝之「飛鳥から平安時代における「包み」の文化：「風呂敷」の語源とその前史」『デザイン学研究』54 巻 4 号,2007,pp.47-56.

-白尾隆太郎監修；福井政弘・菅木綿子著『パッケージデザインを学ぶ 基礎知識から実践まで』武蔵野美術大学出版局,2014

-額田巌『ものと人間の文化史 20・包み』法政大学出版局,1977

-北山研二「見せるアートと見せないアート：クリストの梱包アートについて」『ヨーロッパ文化研究』第 34 集,2015,pp.85-125.

-京都ふろしきドットコム「風呂敷包み方お使い包み/四角いものを包む」https://kyofuroshiki.com/tutumiitiran/otukaitutumi/ （最終アクセス 2023/12/04）